

(論 文)

コメニウス教育思想の歴史的・宗教的背景

— 『大教授学』 にみる歴史的背景に関する試論 —

海 津 淳

キーワード

コメニウス ボヘミア兄弟団 ボヘミア王国 三十年戦争 『大教授学』

序

近代教育学の父と称されるヤン・アモス・コメニウス Jan Amos Comenius (1592-1670) はその代表作『大教授学』 Didactica Magna 1657 (執筆1632-1638) に見られるように、汎知学、直観教授など近代的教育の根幹ともいえる思想を展開し、後世の教育学に多大な影響を与えた。しかし16世紀モラヴィア (現在のチェコ) に生まれた彼は、ほどなくヨーロッパ最大の戦争のひとつ三十年戦争に巻き込まれ、その後生涯にわたって亡命を余儀なくされる。そうした彼の著作には、教育思想に関する独自性、あるいはデカルトをはじめとする亡命後の国際的な交流を背景とする思想の近代性もさることながら、彼が生を受けたモラヴィア、ボヘミアにおける宗教性と歴史的影響が明確に見いだせるのである。

この小論は、特に彼の代表作『大教授学』を参照しつつ、彼の教育思想に見る歴史的・宗教的背景を探る試みである。

1. コメニウスの生涯概観

コメニウスとボヘミア兄弟団、三十年戦争

コメニウスが生まれたのは1592年、現在のチェコ中部モラヴィア地方であるニヴニツェ、あるいはウヘルスキー・ブロード、またはストラージュニツェがその生誕地といわれるが、少なくともその名コメニウス (コメンスキー Komenský) は後見人たる伯父の居住地¹あるいは父の出身地にちなんだものであることが知られている。幼くして父を、相次いで母や姉たちを失った彼は親戚に引き取られ、そこで幼少時にもすでに初等教育を受けていたボヘミア兄弟団²のラテン語学校に学ぶこととなる。

その後1611年からドイツ、ヘルボルンの大学で神学を修めた彼は1614年帰国、プジェロフでボヘミア兄弟団の学校の教師に任じられ、さらに1618年フルネックにてこの教団の学校の校長および教団司祭に叙階される。ボヘミア兄弟団はフスの伝統を引き継ぐチェコのプロテスタント一派であり、コメニウスとはその生涯の最初期から深い関わりを持つばかりでなく、16世紀ボヘミア (チェ

かいづ じゅん: 桜美林大学 講師

コ)の歴史においても無視できない存在である。

しかしコメニウスがフルネックに居を定め妻を迎えた1618年、ボヘミア王国から火の手が上がりやがてフランス、スウェーデンなどヨーロッパ各国を巻き込んでゆくこととなるあの三十年戦争が勃発する。この戦争の宗派対立的要素を簡略化して述べれば、ボヘミア王国の覇権をめぐる同地のプロテスタント貴族とカトリックであるドイツ＝ハプスブルグ勢力の間の抗争といえよう。その詳細に関しては後の章で触れるが、この対立の影響は当然、ボヘミア兄弟団の聖職者たるコメニウスに直接的に降りかかった。1620年のビーラー・ホラの戦い(白山の戦い)のプロテスタント諸侯敗退後、1627年のカトリックの公式宗教化・プロテスタント追放令以降、コメニウスの長い亡命の道への幕が上がるのである。なおそれまでに彼は、代表作のひとつ『地上の迷宮と魂の楽園』*Labyrint světa ráj srdce* 1631(執筆1623)を著している。

亡命と名声

1628年2月、コメニウスは兄弟団のメンバーとともに国境を越えポーランド、レシュノに入る。ここで彼らはラファエル・レツィンスキ侯 Raphael Leszynski の保護を受け、コメニウスは教師、校長として当地の学校教育に関わってゆく。そのなかで出版されたのが新しい効果的な言語学習法について論じた『開かれた言語の扉』*Janua linguarum reserata* 1631で、この作品は後にヨーロッパの12言語に翻訳された。亡命生活のなかでも彼への嘱望と著作活動、それにとまなう名声は日を追って高まりこそすれ衰えることを知らなかった。

ハートリブ Samuel Hartlib (1600-1662)³はイギリスでの学校設置のために議会の承認を得てコメニウスを招聘し(1641)、ルイ13世の宰相リシュリューも同様の計画を抱いていた。良く知られたところでは、1646年から1648年までのスウェーデンのクリスティナ女王による招聘と滞在であろう。1650年にはハンガリーに招かれシャロシュ・パタクの学校改革に従事、1652年レシュノに帰還する⁴がスウェーデンのポーランド侵攻によってこの街も戦火を被り、コメニウスは財産と原稿を焼かれて1656年、アムステルダムへ移住、1670年、同地で世を去った。

2. ボヘミア、モラヴィアの政治とキリスト教

ヤン・フスとフス戦争

さて、まず最初にボヘミアにおけるキリスト教の流れを概観すると、この地のキリスト教はビザンティン、すなわち東方教会のキュリロス Kyrillos (826/827-869) とメトディオス Methodios (815頃-885) の宣教にはじまる。その後ボヘミア王ヴァーツラフ(位921-929)時代にカトリック化、1344年、カレル1世(位1348-1378)の統治下において首都プラハに大司教座がおかれ、この君主のもと国力を充実させるとともにカトリック国としての位置を明確化した。

しかし、まもなくイングランドのジョン・ウィクリフ John Wycliffe (1327頃-1384)の宗教改革思想が流れ込む。当時ボヘミアとイングランド王家の姻戚関係の影響から多くの学生がイングランドで学び、ウィクリフの思想と著作は容易にプラハに移入されたのである。プラハ大学に学んだフス Jan Hus (1370頃-1415)は、同大学の教授、総長、およびプラハのベツレヘム礼拝堂説教者としてウィクリフの教会改革思想に沿った自説を展開し、民衆の熱狂的支持を得た。折からの教会分裂(シスマ)や大学におけるドイツ人とチェコ人(ボヘミア人)の対立、3人の対立教皇とそれぞれの支持勢力、公会議主義派、ボヘミア王と神聖ローマ皇帝といった複雑な対立構造のなかで、フスはウィクリフ説支持、聖職売買・贖宥状批判の故にプラハ大司教や教皇から破門されつつも、彼を支持する王やボヘミア貴族によって保護され著作活動を続ける。しかし1414年のコンスタンツ公

会議に召喚された際自説撤回を拒否したフスは、皇帝ジギスムントの発行した安全通行証の所持にも拘わらず異端として焚刑に処せられた（1415年）。

数日後にその弟子プラハのヒエロニムス Hyeronimus（1380頃-1416）も処刑されるにおよび、ボヘミア側の抗議が噴出した。そこで起こったのがいわゆるフス戦争であった。1419年、プロテスタント市民らがカトリックの市長と参事ら市庁舎の窓から投擲する事件が発生し、他方ではフス派急進勢力がボヘミア南部のタボル山を拠点にタボル派⁵を結成する（1420年）。

そうしたなかで先王ヴェンツェル（ヴァーツラフ4世）（位1378-1419）の死去により彼の弟で神聖ローマ皇帝でもあるルクセンブルク家のジギスムント（位1419-1437）がボヘミア王位を継承したが、これに際してボヘミア人たちは二種陪餐・聖職者の清貧・聖職売買の処罰・礼拝の自由の保証・ドイツ人の公職任命拒否などの条件を提示する。ジギスムントはこれを拒否、教皇に要請し対フス派十字軍を起し、タボル派をはじめとするフス派とカトリック勢力間の戦争が始まった（1420-1431）。

この戦争が解決を見たのは1436年、ジギスムントとボヘミア国会の交渉が妥結し、翌年、ジギスムントは公務における外国人排除、二種陪餐等の宗教的主張の承認、チェコ語の公用語化などを受け入れた。

このようにフス派の宗教改革運動はボヘミアにおいては著しく民族運動的色彩を帯びたものであり、特に既に12世紀にはじまるドイツの東欧進出⁶も背景とした、ドイツと東欧各国の間の複雑な関係の歴史の一端といえるものであった。この後、このフス派からコメニウスの属したボヘミア（あるいはモラヴィア）兄弟団 Unitas Fratrum が形成されていったのである。

ボヘミア兄弟団 Unitas Fratrum

ボヘミア兄弟団 Unitas Fratrum はそうした経緯のなかで成立した信仰団体、後に教派組織化したグループである。その中心人物はペトル・ヘルチツキー Petr Chelčický（1390頃-1460）で、二種陪餐等フス派の主張に沿いつつキリスト中心主義やチェコ語による説教によって⁷人心を獲得し、1467年には教会組織を整備する。その方針は原始教団を範として兵役、宣誓、裁判への関与、公職への就任を禁じ、キリストのまねびを重視し、チェコ語による典礼書、教理問答集、聖歌集さらにはチェコ語聖書を作成した。

彼らの思想の特質は、ヘルチツキーにおいて如実に表れている。彼は『聖なる教会について』 O církvi svaté（1421以降）において教会をただキリストのみによって導かれるすべての平等な信徒によって形成されるものとして規定し、『三身分について』 O trojím lidu řeč（1425頃）では、領主・聖職者・農奴という階級性を批判し、すべての人間の平等を要求した⁸。彼にとってキリストとその十字架の道行きを知りそれに倣い従う人々の間には、領主も高位聖職者も農奴も、その間には何らの区別はないのである。

ヘルチツキーにおいて神学的主張と社会的要求は完全に一致しており、徹底した平和主義とキリストをモデルとした人間社会を再構築するという一種の政治的神学を樹立したのであった⁹。

このボヘミア兄弟団は当初は迫害を受けつつも、1575年のマクシミリアン2世（位1564-1576）、1609年のルドルフ2世（位1576-1611）の布告により信仰の自由を獲得するに至っている。

ハプスブルクのボヘミア支配と国内のプロテスタント

ところでボヘミア王の宗教政策とは如何なるものであったのか。ヤゲロー（ヤギェウォ）朝の2代の王はカトリックであったが、1526年、ハプスブルクのフェルディナント1世（位1526-1564）

がこの国に王として迎えられて以降ボヘミアはハプスブルクの支配が続いてゆくが、その時、宗教的多数を占めていたのは穏健フス派であるウトラキスト *utraquiste* であった。これは教義的には信徒にも聖杯の使用を認めるカリスト派とも呼ばれる穏健派で、すべての社会層において浸透していた。しかし当時勢力を伸張させていたボヘミア兄弟団に対して、新王フェルディナント1世は1547年の都市反乱を契機に弾圧を開始した。

元来カトリックであるハプスブルクのフェルディナントはイエズス会導入、プラハ大司教座再建を果たし、ウトラキストのカトリック化を試みた。これに対して多数派のウトラキスト、ボヘミア兄弟団、さらに都市部を中心に拡大しつつあったルター派のプロテスタント三派は共同で1575年に「チェコ人の信仰告白」を公表、1576年即位したルドルフ2世は1609年、勅許状を出して遂にボヘミアにおける信教の自由を承認するに至り、プロテスタント勢力は国内における安定を確保した。

三十年戦争とボヘミアの変容

このような経緯を経て起こったのが三十年戦争であった。ルドルフ2世によるプロテスタント容認にも拘らず、ボヘミア国内では依然としてハプスブルク＝カトリック＝ドイツ勢力とボヘミア（チェコ）人との間の軋轢、緊張関係は解消するものではなかった。

そのようななかで1617年即位したフェルディナント2世（位1617-1637）は、カトリック強硬派で知られていた。1618年5月、この状況に危機感をつのらせた200人程のプロテスタント貴族がプラハの王宮に侵入し、抗議を繰り返すうちに彼らは遂に二人の国王顧問館を窓から投げ出すという暴挙に出る。そしてこの出来事が、フス時代に起こった窓外投擲事件同様、三十年戦争の発端となるのである。

この事件はたちまちボヘミア中を巻き込む抗争に発展した。ボヘミア国会はフェルディナントを廃し、プロテスタント（カルヴァン派）のライン＝ファルツ選帝侯フリードリヒを国王に迎えた。ハプスブルク＝カトリック勢力に戦いを挑んだ新国王フリードリヒ5世（位1619-1620）とプロテスタント・ボヘミア貴族は、しかし1620年のビーラー・ホラ（白山）の戦いで敗れ去る。彼らが援軍を期待したドイツプロテスタント諸侯は事態を静観したのに対し、スペイン、続いてバイエルンが直ちにハプスブルク側に兵を送ったのであった。

その後の展開は先に触れたとおり、フェルディナント2世が再び王位を獲得、首謀者の処刑に引き続き、プロテスタント貴族の所領没収、カルヴァン派、ルター派等プロテスタントの追放といった一連の処遇の後、1624年にはカトリック以外の信仰が禁止された。そうした状況の中で多くのプロテスタント貴族、商人が亡命、無論コメニウスとボヘミア兄弟団の信徒たちもその中にあった。またボヘミア国内における貴族、国会の権限が大幅に縮小されカトリックが国政における勢力を回復、ドイツ語がチェコ語に代わって公用語となり、ボヘミアは民族性を失い、ハプスブルク＝カトリック＝ドイツ化の道をたどった¹⁰。

4

3. コメニウスの著作にみる歴史的・宗教的背景

コメニウス『大教授学』*Didactica Magna*

教育学の父、コメニウスが経験しなければならなかった祖国の戦禍は、上述の通りである。三十年戦争はその後ボヘミアの内乱から周辺諸国の国家間の戦争に拡大・複雑化していった。1648年のウエストファリア条約によって長い戦争は終結したが、結局、ボヘミアは神聖ローマ皇帝たるハプスブルク家の支配下にはいり、チェコ語の使用も禁じられた。

コメニウスをはじめ、ボヘミア兄弟団信徒たちも帰国の望みを断たれた。そうした中でコメニウスは、後世にその名を残す革新的な教育論を次々に世に送り出すのである。

わけでも『大教授学』は、名実ともにその畢生の大作であろう。この著作は、まず、1628年から1632年にかけてチェコ語で執筆された。1628年は、彼のポーランドへの亡命の年である。このチェコ語の著作は1894年に出版されるまで草稿のまま残されていたが、他方そのラテン語版は、アムステルダムにて1657年に刊行された『教授学著作全集』の中の一編として彼の存命中に出版された。

コメニウスの教育学に関する著作は数多く、それぞれがその領域における重要な主題と思想を含んでいる。しかし本稿では、以下、この『大教授学』の特に冒頭部分における彼の主張にみる、先に概観した歴史的・宗教的背景について検証してゆくものである。

『大教授学』執筆とその意図

この著作は、周知の通り彼の教育思想の代名詞ともいえる汎知学とその教授方法について論じた作品である。特に冒頭、コメニウスはあの名高い言葉で著作の扉を飾った¹¹。

「あらゆる人に、あらゆる事柄を教授する普遍的な技法を提示する大教授学」

この文章は、本文「読者へのあいさつ」でも繰り返される。コメニウスは従来の教育法が労多く効果の少ないものである実情を語り、自らの執筆の意図を明かすのである。(なお引用中の「・」や一字分の空白は、訳者鈴木秀男の原文を尊重したものである。)

「私たちはあえて大教授学 *Didactica Magna* いいかえますと、あらゆる人に *omnes* あらゆる事柄 *omnia* を教授する・普遍的な技法 *universale artificium* をお目にかけてたいと思います。」

コメニウスはこの遠大無比な意気込みが、読者に「夢物語」「正気の沙汰とは」見えないであろうことを予測しつつも、その理由を以下のように続ける。

「申すまでもなく、事柄はすこぶる重大です。これに人類全体の救い *commnis humani generis salus* がかかっておりますだけに、あらゆる人の祈りがここにこめられなくてはなりませんし、また同時にあらゆる人がここに工夫を凝らし、あらゆる人の協力によってこれがひたむきに推進されなくてはなりません。」

コメニウスを語る際に必ずといってよいほど引用されるこの箇所は、その時代背景を知らずに読めば、間違いなく必要以上に大きさなものとして受け取られるであろう。「青少年の教育に人類全体の救いがかかっている」「人類を破滅から救うのは教育のみ」という文言はこの読者への序言(読者へのあいさつ)、続く献辞(献呈状)で繰り返し現れ、コメニウスの紹介にはしばしば引用される表現である。しかし彼とその故国の辿らねばならなかった苛酷な運命を知れば、逆に彼の持つ危機感と使命感、その尋常ならざる故を理解することができるのである。「人類の破滅からの救いの手段としての教育」というモチーフは、読者への序言、献辞において、以下のようなものがある。

「ですから、私が、この大教授学をごらんになる・すべての読者に 次のことを求めますのは、

いや 人類の救い (humani generis salus) のために お願いいたしますのは 当然のことであり
ます。¹²⁾

「ところで、神の聖書が教えておりますはなによりもまず、天の下 人類の破滅 (humanae corruptelae)
を救うには 青少年を正しく教育する (Inventutis recta institutio) より有効な道はほかにない、
ということであります。¹³⁾

「つまり、破滅した人類の救済策 (remedia) を立てなければならないとするならば、それは
なによりもまず 青少年の・注意深い用意周到な教育 (cauta et provida Inventutis Educatio) を
通じてでなくてはならない、ということであります。¹⁴⁾

「ところでしかし、青少年を用意周到に教育するともうしますのは、まず、青少年の魂を 俗世
の破滅から守るように、心を配ることです。¹⁵⁾

コメニウスは、このような人類の破滅に対する救済策としての教育、またその必要性・重要性に
ついて、旧・新約聖書、古代教父や古典古代の哲学から例証し、みずからが考えるその方法を開示、
続く本論でその方法たる「大教授学」を展開してゆくのである。

『大教授学』にみる教育の三大要素

さて、『大教授学』はヨーロッパ教育史上に屹立する、近代教育学の嚆矢たる著作であるが、本稿
では教育学的視点とは別の観点からいくつかの特質を挙げてみたい。

まず、教育の要素であるが第4章「永遠への準備には 三つの段階があること。自分自身（とと
もにあらゆるもの (omnia)）を知り (NOSSE) 支配し (REGERE) 正しく神に向ける (ad Deum
DIRIGERE)」において、彼は教育が普遍的であるべきことを教育の三大要素として以下のように示
している。

- I. 学識 eruditio、すなわち「さまざまな事物 res 技術 artes および言語 linguae をことごとく認
識すること」
- II. 徳性 virtus あるいは尊敬に値する徳行 mores honesti、すなわち「うわべだけの礼儀ではな
く、さまざまな行動が内面でも外面でもすべて釣り合がとれていること omnis compositio」
- III. 神に帰依する心 religio あるいは敬神 pietas、すなわち「人間の魂を至高の神に結びつけ religat
引き寄せる・あの・内面の畏敬 interna illa veneratio のこと」

教育について論じるとき、一般的にはいわゆる「知育」が先ずその筆頭にたつ。場合によっては、
それに「徳育」および「体育」が追加されるのが現状であろう。しかしコメニウスにとって「学識」
とならぶ2大要素は「徳性」および「敬神」なのである。特に「敬神」は、現代のとりわけ公教育
においては除外される場合が多い宗教的要素である。なぜこれが教育の三大要素に組み込まれるの
か。答えはさほど難しくはない。コメニウスはボヘミア兄弟団の一員であるばかりではなく、その
6 指導者たる司祭である。宗教的要素が組み込まれるのは極めて自然なことであろう。またより広い
見地からすれば、ヨーロッパの教育は近代における国家による教育制度確立まで、ほぼ全域でキリ
スト教会によって運営、管理されてきたのである。司祭たるコメニウスが教育に関わり、その中で
学識とならんで敬神を重視するのは汎ヨーロッパ的にも当然の事象である。

しかし『大教授学』を実際に読んでみると、汎教育・直観教授といった近代的教育思想・教育方
法論それ以上に、コメニウスの「教育の必要性の根拠」についての持論が詳細に展開されているこ
とに気付くのである。

教育の必要性の根拠

それではコメニウスにとっての教育の必要性の根拠とは何か。彼において、まず人間の究極の目的は第2章の章題として明瞭に提示されている。

「第2章 人間の窮極の目的 (*finis ultimus*) は、現世のそと (*extra hanc Vitam*) にあること¹⁶」

この章句に集約されるとおり、コメニウスにとっては「現世の生命は、永遠の生命への準備にほかならず」「現世の生命は、来世を目指しているわけですから、(本来から申せば) 生命ではなく本当の生命いつまでも続く生命の序幕」なのである。すなわち現世の生は来世への準備段階でありそれは必ず終末を迎えるものであるが、これに対してその後の来世は、永遠の生命かあるいは永遠の業罰・滅びとして未来永劫に続く。従って人間のこの世の生命というものは、その後得るべき「永遠に滅びることのない生命」への準備に他ならないのである。

『大教授学』ではこの伝統的キリスト教思想が、ほぼ冒頭三章にわたって展開される。

そして先述の教育の三大要素を示した第4章では、それを以下の通り集約する。

「ですから、人間の・困極の目的が神とともにある・永遠の幸福であることは明らかです。けれども一段下の目的 *subordinati fines*、つまり通り道である現世の生命に役立つ目的 *inservientes fines* は、いったいなんでしょうか。これは、人間の創造にとりかかった時の神が思いを凝らす言葉から明らかになります。(神は申しております) われらわれらにかたどり われらの像のごとくに人間をつくり、これに海の魚と空の鳥と全地と地に動くところのすべての獣とを治めさせよう。申すまでもなくこのことからわかる通り、人間が目に見える被造物の間におかれた目的は

- I. 理性を備えた被造物 *creatura rationalis*
- II. 被造物の支配者である被造物 *creatura creaturarum domina*
- III. 自分の創造主の似姿であり喜びである被造物 *creatura Creatoris sui imago, et delictum* となることです。

この三者は、どれ一つとして離れられないように密接に結びついています。それというのも、現世と来世の生命の土台は ここに基礎をおいているからです。¹⁷」

その帰結としてコメニウスは上述の三大要素を教育の根幹として、以下のとおり提示するのである。

「以上のことから出てまいります、人間が生まれた時から負わされている注文は、

- I. あらゆる事柄を知る者 *rerum omnium gnarus* となり、
 - II. さまざまな事物と自分自身とを支配する者 *rerum et sui potens* となり、
 - III. 万物の源泉である神に自分自身とあらゆるものをかえす者となれ *ad Deum se et omnia referens*、
ということであり、この三者を、世間ふつうの三つの言葉で表せば、
 - I. 学識 *eruditio* (さまざまな事物 *res* 技術 *artes* および言語 *linguae* をことごとく認識すること)
 - II. 徳性 *virtus* あるいは尊敬に値する徳行 *mores honesti* (うわべだけの礼儀ではなく、さまざまな行動が内面でも外面でもすべて釣り合がとれていること *omnis compositio*)
 - III. 神に帰依する心 *religio* あるいは敬神 *pietas* (人間の魂を至高の神に結びつけ *religat* 引き寄せる・あの・内面の畏敬 *interna illa veneratio* のことである、と考えます。)
- でありましょう。

学識とはさまざまな事物 (Res) 技術 (Artes) および言語 (Linguae) をことごとく認識すること (omnis cognitio) であり、徳行とは、うわべだけの礼儀ではなく、さまざまな行動が 内面でも外面でも すべて釣り合いが取れていること (omnius compositio) であり、神に帰依する心とは、人間の魂を至高の神に結びつけ (religat) 引き寄せる・あの・内面の畏敬 (interna illa veneratio) のことである、と考えます。¹⁸⁾

汎教育の根拠

このように、コメニウスにとって教育とは、人間が来世における永遠の生命を得るために現世を正しく生きるため必要な手段なのである。そしてそれこそは、「あらゆる人に」「あらゆることを」教える「汎教育」であるべきなのであるが、この遠大な理想が可能である理由について、コメニウスは第1章から論述する。その章題は「人間は、被造物のうち最高の・最も完璧な・最も卓越したものであること」というものである。

キリスト教はその「旧約聖書」冒頭「創世記」にみられるように、人間と他の生物を最初から峻別している。これによれば世界の創造者なる神は無からすべてを創造し、その最後に「人間」というものを自らの姿に似せてすなわち「神の似像」として創造し、被造物の支配・管理を託したのである¹⁹⁾。

第1章では最初にピュタゴラスの言葉を引用しながらも、「詩篇」第8編、「テモテへの第一の手紙」第3章16節、「ヨハネによる福音書」第1章52節ほかを引用しつつ、人間が神の似像であり、その自覚を持って自らの務めを果たすべきことを勧告している。彼の文章は以下のとおりである。

「それゆえ なんじはさとらねばならぬ、なんじが わが創造の業の・最も完璧な頂点 (absolutus colophon) であり それの・感嘆するべき集約 (mirabilis Epitome) であり 被造物の間にいる・神の代理人 (Vicaris Deus) であり わが栄光の冠 (corona gloriae meae) であることを。

願わくば、右の言葉が一つ残らず、神殿の両扉にでなく 書物の扉にでもなく さらあらゆる人の舌 耳 眼にでもなく、まさしくその心臓に刻み込まれてほしいのです。人間を形成する任務についている者は皆、万人がこのような・自らの尊厳 (dignitas) と卓越 (excellencia) との思いを生きるように 導かなくてはなりませんし、この崇高 (sublimitas) を獲得する目的へ 一切の手段を向けなくてはならないのです。²⁰⁾

コメニウスにとってこの世は、神が望み給うた「あるべき状態」から離反した人間によって破滅的な状況にさらされている。(より具体的には彼が体験した戦争の惨禍であろう。)

そしてその救済は、ひとえに人間の教育にかかっている。そこで、コメニウスは「人間」という存在をどのように定義しているのかが上記の記述である。それが徹頭徹尾神学的・キリスト教的であることは明確であろう。彼にとって人間は創造以来アダムとイヴに見るように神の示すあるべき姿から離反してしまっているが、一方、万物の支配者たる神の創造の頂点、神の似像、神の代理人でもある。その人間がすべてを学び世界をあるべき状態に回復することは、その創造の過程からその能力をもってすれば可能であり、また何よりそれは人間の責務なのである。

『大教授学』にみる合理性・科学性

このようにコメニウスの主張を追ってゆくと、『大教授学』における彼の宗教性が大きな重みをもって厳存していることに気づくのである。しかし他方、いうまでもなくこの作品においては極めて

合理的・近代的・科学的な知識・見解に基づく教育理論も展開されており、教育学的に高く評価され論じられてきたのはむしろこちらの側面である。本稿ではそうした彼の教育思想・教育方法論の詳細を論じることを目的としておらず、残念ながらそうした箇所は割愛せざるを得ない。とはいえ、宗教性とは対極ともいえる彼の科学知識の豊さは、例えば『世界図絵』（『可視界図示』）Orbis Sensualium Pictus 1658に見られる百科全書的知識の中に当時最先端の解剖学、天文学等の知識が充分に取り入れられていることから、またかのデカルトとの交流からも証明することができるであろう。ここでは、そうした彼の豊かな学識の一面を垣間見せる一文を紹介し、宗教家、教育家であると同時に科学²¹と合理主義の時代でもある17世紀知識人たる彼の姿を明示しておきたい。以下は第5章「あの三者〔学識 徳性 神に帰依する心〕の種子（seminaは、自然的に（a natura）私たちの中にある（nobis inesse）こと）」において、それを論証するために、神学的見地と並んで論じられた箇所である。

「私たち人間の脳髓 *cerebrum* つまり思考の製作場 *cogitationum officina* を木臘になぞらえることも、適切です。木臘には刻印を刻んだり木臘で小さな模型を作ることができるからです。…これと同じように脳髓は、あらゆる事物の映像 *simulachra* を受け取ります、広大な世界に含まれている・どんなものも自分のなかにしまい込むのです。このことによって同時にまた私たちの思考 *cogitatio* とはなにか、知識 *scientia* とはなにかが、見事に図解されます。つまり私の視角 嗅覚 味覚 触角にふれるものはどれも皆、私にとっては刻印 *sigillum* です。この刻印によって事物の写像 *imago rei* が脳髓に刻み込まれる *imprimitur* わけです。²²」

コメニウスの希求

さてコメニウスはこの著作の最後に、彼が理想とし痛切に実現を願った汎教育の現実化について章を割いている²³。「この・普遍的な教授方法の実施にとりかかるに必要な条件について」と題された『大教授学』最終章では「こうした探求が、ただの探求に終わるのではなく、ついにはいつか実現されて（*tandem aliquando disponi*）相当な成果をおさめる（*in effectum aliquem*）ためには、いったいなにをする必要があるのか、この点も申しそえなければなりませんまい。」という意図のもと、彼の最後の主張が展開される。彼は、汎教授法を身につけた教師育成とその生活保障、貧民子弟の就学手段の確保、旧教育陣による妨害の回避、汎教授法のための教科書準備、実施のための学会（*societas Collegialis*）招集、と順を追ってその教授法実現のために必要な条件を提示する。

そして後半でコメニウスは、その現実化に向けて各界に喚起を促す。彼が対象とするのは両親、教師、学識者、神学者、為政者である。彼は為政者の援助とすべての人の協力の必要性から始め、教育に関わる最も身近な両親、汎教育へ反感を抱くであろう知識者や神学者に対する説得、そして為政者・君主への喚起・切望が続く。

「そのほかの・学識ある方々よ、神から知恵と鋭い判断力を授けられて この計画について判断を下す力もあり また 立派な意図をさらに思慮深い提案によって改善する力もそなえている方々よ、…（略）…あなた方の・学識の力によって 他の人々をもまた学識ある者にしなくてはならないのです。…（略）…青少年を正しく教育することがとりも直さず 教会（*Ecclesia*）と国家（*Respublica*）とをつくり上げ（*efformare*）また改革する（*reformare*）ことであるのですから、これを承知している以上は、ほかの人が手を差し伸べて援助を求めている場合に 手をこまねていることは、許されることではありませんまい。²⁴」

9

上記は学識者への喚起であるが、そうしたなかでも殊にコメニウスの為政者・君主に対する言葉は注目に値する。

「キリストにかけて、また もし私たちの子孫の幸福がえられるならば その幸福にかけて、申し上げます。どうか肝に銘じて下さい。重大な事柄です。ああ、神の栄光と全民衆の幸福とにかかわる・余りにも重大な事柄であります。」「あなた自身とあなた方の民衆との利益を心の底から考えて… (略) …あなた方の祖国愛を信じてまいったのであります。… (略) …祖国に奉仕する・こうした人々の隊列 (copia) を 限りなく続々とつくり出す・本当の・間違いない・確かな道が、ここに示されている、ということです。だからこそルターも、ドイツ諸都市に学校の設立を勧めるときに、聖なる思いの中で 正しくも次ぎのように書いたのであります。都市 居城 砦 武器庫を立てるのに 金貨一枚を要するのであれば、若者ひとりですらこれを正しく教育するためには 金貨一〇〇枚をあてなければならぬ。なぜなら、若者が成人した折には 他の人々を徳に導く案内者となることができるからである。… (略) …重ねてもうしますと、例え若者ひとりでもこれを正しく教育するためには いささかの出費も惜しんではならない…²⁶⁾

「君主の方々よ、あなた方の門を開き 時の扉を上げて 栄光の王を迎えて下さい (詩編 第二十四)。権力の子であられるの方々よ、主に捧げて下さい。栄光と栄誉とを主に捧げて下さい。… (略) …なにがしかの出費をためらうようなことは やめて下さい。主に与えて下さい。幾千倍にもなってあなた方のもにかえってくるのです。」

冒頭では教育を人類破滅からの救いのための手段と断じ、その「救い」とは現世のみならず究極的には来世における救済であることを繰り返し強調したコメニウスであるが、その終章には、現世における汎教育実践とそのあるべき協力者＝この世の権威者への希求が如実に雄弁に示されている。故にこの最終章からは、彼が来世の救いのみを渴望する単なる終末論者あるいは瞑想者のような存在ではなく、現世＝現実世界を見据えた教育思想家かつ宗教指導者であったことが読みとれるのである。

結語

コメニウスは疑う余地なき類まれなる教育学者である。その教育思想・教育方法論は独創的、近代のかつ普遍的である。彼はボヘミア兄弟団と深く関わりその一員として教育に尽力し、そればかりか三十年戦争に関わる政治的宗教政策によって故国ボヘミアを追われヨーロッパ各地を転々としつつも、ハンガリーやポーランド、スウェーデン、オランダ (アムステルダム) が彼を教育改革のために招聘し、またそれに応えて彼は多くの著作を残し名声を博した。

10 他方、ボヘミア兄弟団司祭、神学者としての彼の姿は、そうした教育者、知識人としてのコメニウス像の影に隠れがちである。しかしそうした彼の一面は、実は彼の代表作『大教授学』にも明確に表れている。本稿はそうした要素を、17世紀に至るボヘミアの宗教と政治、ボヘミアおよびモラヴィアのプロテスタントにおけるフス派の影響とその思想を視野に、コメニウスの教育思想における宗教的・歴史的背景を検証することを試みたものである。

「すべての人に」「すべてのことを」という汎知学、汎教育の思想は、一見、近代の民主思想を想起させるが、彼の時代に視点を定めれば、むしろ先述の様な身分制への批判を展開し宗教的平等を主張したヘルツキーの神学的影響を見てとることができよう。(この視点の可能性については、井

ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』においても示唆されている²⁷。)また「人類を滅亡から救うのは教育のみ」というコメニウスの代名詞のような言葉も、ボヘミア兄弟団の絶対的平和主義を想起させる。あるいはこの教団の司祭として信徒を率い、『ボヘミア兄弟団の教えと信仰についての信仰箇条および宗規』*Confessio aneb počet z víry a učení I náboženství Jednoty bratří českých 1662* 等、彼自身が教団教義そのものに関する著作を著していることは、彼の思想がボヘミア兄弟団と直接関連を持つことの疑いのない証左であろう。しかし、ボヘミア兄弟団聖職者としてのコメニウスの神学思想に関しては、また別のテーマとして機会を改めて検証したい。

そして実際に『大教授学』を繙くと、彼のそうした主張の内容もさることながらその行間に横溢する緊迫性、緊急性が読む者の注意を引く。これらは教育学的見地からは、むしろ余計な序文、精神論的・宗教論的修辭のように映らなくもない。しかし故国の政治的混乱と戦火、それに伴い自らが庇護すべき兄弟団信徒たちの安全に責務を持つ教団司祭というコメニウスのもう一つの姿が、ここにありありと浮き彫りにされるのである。

コメニウスの亡命は、一種の政治亡命といえるのであるが、例えばダンテ・アリギエーリ Dante Alighieri (1265-1321) のような単独の政治亡命ではない。コメニウスはハプスブルクの宗教政策によって追放されたフス派プロテスタント、ボヘミア兄弟団の指導者たる司祭であった。彼は教育改革の指導者としてハンガリー、スウェーデンの招聘を受けるが、彼自身は共にボヘミアを脱出した兄弟団信徒の保護を彼ら国外の有力者に求める交渉も行っているのである。そうしたコメニウスの相貌を知る時、『大教授学』に現れる緊迫感の理由を理解することができるのではなかろうか。

また「人類の救いは教育にかかっている」「破滅した人類」という表現は、コメニウスが体験した戦争の悲惨・人間の墮落・残酷性に基づくものと考えても間違いはなかろう²⁸。

彼の『地上の迷宮と魂の樂園』には、当時の社会における様々な階層の墮落と腐敗、無知蒙昧さが描きだされている。この著作にみる人間たちの姿がすでに「破滅した人間」のそれであるが、殊にここに描かれる出兵前の兵士たちの刹那的な様相は自らの明日を望めぬ存在としての彼らを浮き彫りにし、実際の戦場での惨状を容易に想起させるのであり²⁹、その実際はジャック・カロ Jacques Callot (1952-1635) の作品に容赦なく描きだされている³⁰。

しかし、実際に『大教授学』を読むと、彼にとっての「人間の救い」「破滅した人間」というモチーフにはこの世の現状もさることながら、伝統的キリスト教の来世観特有の「永遠の命の準備期間としてのこの世の生」という要素・視点が際立っていることは既に見てきたとおりである。他方だからといって彼が人間の「救い」に言及するときに、来世のみを遠望し来世のみに望みをつないでいたわけではない。彼は現実に、故国を追われ安住の地を求める多くの同胞の運命を背負っていたのである。そうした彼にとって「人類の救い」とは、来世における永遠の命であるとともに、現実世界における人々の安寧、その相方であった。彼にとって来世という宗教的世界・概念と、現実世界の様相は決して全く別のもの、乖離した世界ではなかったに違いない。事実ボヘミア兄弟団をはじめとする当時のフス派の極めて社会改革的、民族主義的主張は、来世のみならずその準備段階としての現世における人間のあるべき姿とその実現手段としての教育を提唱したコメニウスの宗教理念と一致している。

現代人には奇妙に感じられる実証的科学・合理主義と天を希求する宗教性のコメニウスにおける複雑な融合は、いずれにせよ彼自身の中で何らの齟齬なく共存しその教育思想を形成しているのである。

そうしたなかで書きあげられた『大教授学』は、単なる近代的教育思想・教授法というだけではない、歴史的あるいは人間存在論的な重みを担った書物である。

【注】

- 1 堀内守『コメニウスとその時代』玉川大学出版部、1984年。p.20。以下、コメニウスの生涯に関しては、主として同書および井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998年、Comenius, Jan Amos, *Art et enseignement de la prédication* (trad., parLarangé, Daniel S.,) Paris, L' Harmattan, 2006. Larangé Daniel S., *La parole de Dieu en Bohém et Moravie:La tradition de la predication dans l' Unité des frères de Jan Hus à Jan Amos Comenius*, Paris, L' Harmattan, 2008. を参照している。
- 2 Unitas Fratrum, Unité des Frères(仏)の訳語に関してはボヘミア同胞教団(堀内)、チェコ兄弟教団(井ノ口)、モラヴィア同胞団等があるが、本稿では訳語として「ボヘミア兄弟団」を使用する。
- 3 Samuel Hartlib イギリスにおいてハートリブ・サークルを主導、政治・宗教・経済・知識活用における改革を目指し、多岐にわたって活動した。
- 4 Daniel S.Larangé による。堀内の前掲書ではレシュノへの期間は1654年である。
- 5 タボル派はフス派のなかでも下層市民・農民を中心とした層により形成された。黙示的・終末的・民族主義的性格を持ち徹底した教会改革・社会改革を主張した。フス戦争でも指導者ヤン・ジジュカに率いられて戦った。
- 6 ルクセンブルク家やハプスブルク家などドイツの有力家門による支配のみならず、12世紀来のドイツの東欧進出・入植において、特にハンガリー、ボヘミアの鉱山開発に多くのドイツ人技師が招かれ、同国に鉱山都市を形成したこともその一例であろう。
- 7 Larangé Daniel S., *La parole de Dieu en Bohém et Moravie:La tradition de la predication dans l' Unité des frères de Jan Hus à Jan Amos Comenius*, Paris, L' Harmattan, 2008.
- 8 Ibid.,p.310.
- 9 Ibid.,p.311.
- 10 没収された所領はカトリック教会、ハプスブルク派貴族、傭兵隊長に分配されてこれらが新興貴族層を形成、その少なからぬ数がドイツ人であった。あるいはまた戦争によって減少した耕作人口に対しドイツ人入植が行なわれた。
- 11 以下、本稿では『大教授学』資料として仏語版Comenius, *La grande didactique ou l'art universel de tout enseigner à tous*, Klincksiek, 2002を使用、邦訳として、梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀男訳『世界教育学選集24 大教授学1 コメニウス』明治図書、1962年初版1976年版、および、梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀男訳『世界教育学選集25 大教授学2 コメニウス』明治図書、1976年版を引用。
- 12 梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀男訳『世界教育学選集24 大教授学1 コメニウス』明治図書、1962年初版1976年版、22ページ。(読者への序言)
- 13 前掲書、37ページ。(献辞)
- 14 前掲書、38ページ。
- 15 前掲書、39ページ。
- 16 前掲書、51ページ。
- 17 前掲書、61-62ページ。
- 18 前掲書、63-64ページ。
- 12 19 「旧約聖書」、「創世記」1章26節「神は言われた “我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。”」
(新共同訳)
- 20 前掲書、50ページ。
- 21 「17世紀科学革命」という言葉に見るように、この時代天文学、解剖学、博物学などの領域で精密な実験・観察に基づく実証的科学が大きく発展した。
- 22 前掲書、72ページ。

- 23 勝田守一監修、鈴木秀男訳『世界教育学選集25 大教授学2 コメニウス』明治図書、1976年版、143-153ページ。
24 前掲書、147-148ページ。
25 ルターは教育の必要性について『ドイツ全市の参事会員にあてて、キリスト教的学校を設立し維持すべきこと』An die Radherren aller städte deutsches lands:das die Christliche schulen auffrichten vnd halten sollen.1524 を著し、為政者に学校設立と民衆の教育を喚起している。ルター著作集委員会編『ルター著作集第1集 第5巻』聖文舎、1967年、413-456ページ参照。
26 前掲書、151-152ページ。
27 井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998年、24ページ。「すべての人を教育の対象と考えたコメニウスの立場について、宗教改革という時代背景やプロテスタントの一宗派であるチェコ兄弟団の指導者であったという彼のその経歴から「神の下における平等」の視点から敷衍して論じることも可能であろう。しかしそのことだけで説明するにはいささか説得力に欠けることも否定できない。」
28 前掲書、24-25ページ。井ノ口もコメニウスの三十年戦争による祖国の荒廃によって「人類の破滅を救うための唯一の手段としての教育」との確信に至ったと記述している。「十七世紀前半にはほぼ全ヨーロッパを巻き込んだ三十年戦争(1618～48年)によって、現在のチェコ共和国であるボヘミアとモラヴィアの人口は、約三〇〇万人から九十万人に激減したと言われる。祖国のこのような荒廃した姿に直面したコメニウスは、「人類の破滅を救うには青少年を正しく教育するより有効な道はほかにない」と確信するに至った。」
29 J.A. コメニウス 藤田輝夫訳 相馬伸一監修『地上の迷宮と心の楽園』東信堂、2006年。118-123ページ。
30 カロはロレーヌ地方出身の版画家。1633年の版画集「戦争の惨禍」Les grandes misères de la guerre に三十年戦争における目を覆うような人間の蛮行を余すところなく描いている。

【資料】

- Comenius, *La grande didactique ou l'art universel de tout enseigner à tous*, Klincksiek, 2002.
Comenius, Jan Amos, *Art et enseignement de la prédication* (trad.par Larangé,Daniel S.) L' Harmattan, 2006.
梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀男訳『世界教育学選集24 大教授学1 コメニウス』明治図書、1962年初版1976年版。
梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀男訳『世界教育学選集25 大教授学2 コメニウス』明治図書、1976年版。
J. A. コメニウス 井ノ口淳三訳『世界図絵』平凡社、1995年。
J. A. コメニウス 藤川輝夫訳 相馬伸一監修『地上の迷宮と心の楽園』、東信堂、2006年。

【参考文献】

- 堀内守『コメニウスとその時代』玉川大学出版部、1984年。
井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998年。
Larangé Daniel S., *La parole de Dieu en Bohême et Moravie:La tradition de la prédication dans l'Unité des frères de Jan Hus à Jan Amos Comenius*, L' Harmattan, Paris, 2008. 13
Denis, M., *Comenius—Une pédagogie à l'échelle de l'Europe*, Peter Lang, Bern,1992.
矢田俊隆編『世界各国史13 東欧史』山川出版社、1977年。
アンリ・ボグダン 高井道夫訳『東欧の歴史』中央公論社、1993年。
M.D. ノウルズほか 上智大学中世思想研究所編訳／監修『キリスト教史4 中世キリスト教の発展』平凡社、1996年。

R. J. W. エヴァンス 新井皓士訳 『バロックの王国 —ハプスブルク朝の文化社会史1550—1700年』
慶應義塾大学出版会、2013年。

ゲオルク・シュタットミュラー 丹後杏一訳 『ハプスブルク帝国史 —中世から1918年まで』 刀水
書房、1989年。

薩摩秀登 『プラハの異端者たち —中世チェコのフス派にみる宗教改革』 現代書房、1998年。

ルター著作集委員会編 『ルター著作集第1集 第5巻』 聖文舎、1967年。

ルター著作集委員会編 『ルター著作集第1集 第9巻』 聖文舎、1973年。

(受理 平成26年1月17日)